

自己否定の文明と自己肯定の文明

安田喜憲

一、“物づくり”から“人づくり”的時代へ

戦後五十年、日本はアメリカを模範とし、追いつけ追いこせてがんばってきた。アメリカという目標に近づくためのレールがはっきりと見えていた。そんな時代には、問題解決型の秀才が大きな力を發揮できた。既存のものをより便利に、より早く、より安く、より高品質に作り直せばことたりた。物づくりのみではない社会の制度もアメリカを模範として、アメリカ型民主主義社会を目指にして大量生産・大量消費の社会システムを構築し

をならべるまでに発展した。もはや模範とすべき対象はなくなってしまった。自分で自分のレールを敷いていかなければならなくなつた。

しかもそのレールを敷く先の二十一世紀は、地球環境問題、人口爆発、食糧危機そして高齢化と、多くの難問の山積する嵐の時代である。しかも、これらの難問には正解は予定されていない。これからは何の航海図もなしに、この嵐の海に日本丸は船出しなければならないのである。日本は独自にその航海図を作成しなければならぬ立場になつていたのである。

目標とする対象が消えた今、それでは日本独自の航路とは何なのかを考えようとした時、ふと自らの足元を見ると、日本人はいったい自らが何者なのか、何のために金もうけしてきたのか。日本国家のアイデンティティーとは何なのかさえわからなくなつていたのである。

それは当然のことである。戦後五十年の間、日本は國家のアイデンティティーはおろか、日本文化の核となるものは何なのかということにたいしてさえ、ほとんど関心を示してこなかつたからである。戦後五十年間は、国

てきた。

それは人間の育成においても同じだった。幼い頃から塾に通い、既存の与えられた問題をいかに早く正確に解くかに全力が投入された。そして、おそらく強烈な自己否定など体験することなく、既存の問題解決にすぐれた秀才が受験戦争の栄光をかちとり、日本のリーダーとなつた。模範とすべき対象があり既存のレールが存在する間は、こうした問題解決型の秀才・翻訳型の秀才は大きな力を發揮できたのである。

しかし、いつしか日本は、アメリカやヨーロッパに肩

家と民族のアイデンティティーを急速に喪失した時代であつたと言えるだろう。

そしてここにいたつて、日本を担う問題解決型の秀才の限界が見えてきた。与えられた問題、しかもいつも、正しい解答が予定されている問題の解決にばかりとりくんできた人間にとっては、まったく新しい問題を自らが創造し、模範解答のない白紙の上に新しい航海図を作成することは、かならずしも得意とするところではなかつたのである。既成の枠組をはずれることなく予定された正しい解答にたどりつく訓練ばかりを行つてきただ人は、まったく未知の新しい世界を大胆に創造するという冒險心と創造性を失なつてしまつていただのである。

戦後五十年間は、豊かさを求めて、“物づくり”に邁進した五十年だった。そこでは人間もまた豊かさを生み出すための一つの歯車にすぎなかつた。これから五十年は、真に創造的な日本人を育成する“人づくり”的な時代となろう。未知の荒海にしつかりとした航路を敷くことができるように最澄や空海型の創造性豊かな天才型の人材の育成を怠ざなければならない。“物づくりの時

代”から“人づくりの時代”へと時代の流れを大きく転換させていく必要がある。その時、宗教のもつ重要性が再び注目をあびはじめたのである。

二、自分史のなかの宗教

私は大学受験に失敗したおちこぼれである。郷里の三重の田舎から私と従兄の二人が京都の大学を受験した。従兄はみごとにパスしたが、私は落ちた。小さな田舎のこととて、近所の人々の目も気になつたが、なによりも父母の期待にこたえることでのきなかつた自分がなさけなかつた。それから数年の中、私は強い自己否定に陥つた。自分はダメな人間だ。何をやつてもうまくいかない。どうして人並の親孝行さえできないのか。自分の能力のなさを感じながら自信のない日々を送つた。

そんな時、神仏に救いを求めたくなるのは人の常であろう。私は仏教書を読んだ。その時、最澄の「入山釈文」の「愚中ノ極愚、狂中ノ極狂、塵禿ノ有情、底下ノ最澄」の一文に出会つた。自分は愚か者の極であり、気の狂つた人間の極であり、うすぎたない人間の最低の人指帰」に述べられている。

「老親瞞瞞として冥壤に臨み近づけり、比の余が頑頑たる、呻を反す由し無し。嗟呼、悲しき哉。進むで仕へむと欲すれば、己に竿を好む主無し。退いて黙せむと欲すれば、禄を待つ親有り。進退の惟れ谷まれるを歎き、起居の狼狽に纏る。」

（私が愚鈍なため、父母に恩を返す方法がない。月日はすぎ去

り、親の命は残り少ない。進んで仕官しようとしても、私を雇つてくれる主人はいないし、黙つて何もしないでいると、私の禄を待つている親がいる。ここに私の進退はきわまり、いてもたつてもいられない思いにただただうばいするだけである）

この「三教指帰」の中に仮名乞児の名をかりて書かれた一文は、自ら否定に陥つた多感な青春時代の空海の真の気持であつたにちがいない。

間だというのである。

この一文は十九歳の最澄が出家し、比叡山の山中に草庵をかまえ修行の生活に入った頃に書かれたものである。その頃、最澄は自己否定の極限をさまよつていた最澄においてさえ、自分がダメだと思った時があつたのだということを発見して、何か魂が救われた思いだつた。しかし、この最澄の強い自己否定こそが、後に天台本覚論の「山川草木国土悉皆仏性」を天台宗の根本理念とするという思想の原点になつたと思うのである。

なぜ強い自己否定が、人間のみでなく人間以外の山や川や草木にいたるまであらゆるもののが仏になれるという教えを導びいたのか。なぜなら強い自己否定とは、自らの小ささを認識することであるからである。この広大な宇宙そして多様な生命世界の中で、自分という存在は何と小さい、とるにならない存在なのかという認識なしには、「山川草木国土悉皆仏性」を真に実感することはできなきない。

最澄とともに平安仏教の旗手となつた空海もまた、多

そしてこの空海もまた最澄と同じく、紀伊半島や四国の海岸で修行にあけくれ、自己否定に陥つた自らの魂をいやし、そして、自らの生きるべき道を模索したのである。自己否定の極限をさまよつた空海や最澄を救つたのは、日本の森と海であったのである。

本来人間とは罪深い存在である。その強い自己否定から脱却するために、人々は修行し、そのきびしい修行の中から悟りをひらき、新たな宗教が生れたのではあるまいか。偉大な宗教家はいずれも強烈な自己否定の持主ではなかつたかと思うのである。

自己否定はまた古来、日本人が持つていた日本文化の根幹を形成するものでもあつた。自己否定を自らの文明の中にきつちりと受け取めているのは、日本人であるといつても過言ではあるまい。

三、見つめられる由

ら、あるいは大海原のかなたから、自分をじっと見つめる目を感じる。その目は神や仏の目なのである。古代の人々はそうした大自然の目を、神や仏として感じ祈つたのである。大自然の神々によって自らがじっと見つめられていることを感じができる人によってのみ、新たな宗教への発心の道が開かれているとも言えるのである。それは自分の小ささを認識することなくして、神や仏の光を感じることはできないことを物語つっている。

私は今、中国の揚子江流域に五千年前に発展した長江文明の研究にとりこんでいる。五千年前、長江流域には稻作を生業の基盤とした文明が存在したのである。その長江文明を特色づけるのは玉器である。浙江省良渚遺跡から出土した琮とよばれる玉器には、図1のような神獸人面紋様が彫られている。揚子江ワニをデフォルメしたといわれる怪獣の中でもっとも強調されているのが目である。五千年前の人々はこの怪獣の目に見つめられると畏敬の念をいだいたのである。

さらに時代がくだって三七〇〇年前の四川省三星堆遺跡からは図2に示すような目のとびだした奇怪な青銅製

のマスクが大量に発見された。この目は、朝太陽が昇る時突出し、夕方、太陽が沈むとともにひっこむという。このように長江流域の人々が目に異常なまでにこだわったのは、目は人間の体の中でもっとも弱くて最も大切なところであるだけでなく、目は命の根源を司さざるところだからである。人間は死ぬと瞳孔が開く。一昔前までは、お医者さんは、この瞳孔を見て、死の判定を下した。

そしてこの人間にとつて一番大切な生命の根源を司さどる目が、神においてももっとも強烈な力を發揮するところと古代の人々が考えたのは当然の帰結であろう。

同じような世界觀は日本の縄文時代の土偶（図3）にもみとめられる。なぜ縄文人は顔の中で目だけを異常に強調したのか。それは目こそが生命の再生と循環を司さどる命の根源であり、神々の力がそこに凝集していると考えたからにほかならない。

そして、この雑誌の主宰者である創価学会の会員の人々がもつとも崇敬する日蓮聖人もまたこの日の重要性を説いている。それは、縄文時代以来、日本人の中に



図2 3700年前の四川省三星堆遺跡から出土した青銅製のマスク



図1 5000年前の中国浙江省良渚遺跡から出土した玉器に彫られた神獸人面紋様



図3 3000年前の青森県亀ヶ岡遺跡から出土した
縄文時代晚期の遮光器土偶

永遠と受継れた日本人の心性の根源から発した教えであったとみなすことができる。日蓮は、目に注目することによって、神や仏に見つめられていることを感じる」との大切さ、自らの小ささを認識する自己否定の大切さを説かれたのだと私は思うのである。

そしてこの日にこだわる思想もまた森の思想であるといつても過言ではない。四川省三星堆遺跡の青銅のマス

クの目は、朝、太陽が昇るとともに飛び出し、夕方、太陽が沈むとひつこんだ。古代の人々は太陽は朝生れ、夕方には死ぬと考えた。同じようく森もまた春には若葉が芽吹き、夏の青葉、秋の実りの季節をへて冬には死ぬ。しかし、再び春には若葉が吹き、宇宙と大自然は、永劫の再生と循環をくりかえしている。

三星堆遺跡のマスクの目が朝には飛び出し、夕方にはひっこむけれども、再び翌朝には太陽と同じように生れかわる。古代の人々はその神々の目に命の再生と循環を願つたのである。永劫の再生と循環をくりかえす宇宙と大自然に歩調をあわせながら、命の再生と循環を願う気持が、巨大な目の像を作つたのである。そして、その命の再生と循環を支配しみつめる神々の目を、古代の人々ははつきりと認識していたのである。

東アジアの稻作文明を基本とする日本や中国そして東

南アジアの国々には、今でもこうした自己否定の文明の伝統が受継がれているといつてよいであろう。

四、自己肯定の文明

この自己否定の文明の対極にあるのが、自己肯定の文明である。自己肯定の文明をもつとも端的に表現しているのが、『我思う故に我あり』という有名なデカルトの言葉である。西洋人に足を踏まれて痛いというと、君が僕の足の下に足を入れたから悪いのだという返事がかえってくると昔はよくいわれたものだ。そんなことは現実にはないが、自己否定の文明の下に育つた日本人が外国で連発する言葉は、アイ・アム・ソリードイエスである。それに比べて確かに欧米人はアイ・アム・ソリードはめつたに言わない。

戦後日本の教育では、はつきりと自分の意見を言える

子供の教育を最大の目標においた。それほどに日本の子供ははにがみやで、自分の意見をなかなか言おうとはしない。そうした傾向は、昔からの自己否定の文明の伝統がより強く残っている田舎の子供に多い。これに対し、

歐米の子供たちは、はるかに堂々として自分の意見を主張する。

自己否定の文明は自らの小ささを認識することから発するのに對し、自己肯定の文明は自らの存在の実感と、自らの大きさを認識することから出発すると言つてよいであろう。自分が思うからこそこの世は存在するのだ。自分がなければこの世は存在しないという自己肯定の文明はまたきわめて人間中心的な文明である。世界は宇宙は大自然は自己としての人間のために存在すると考える。

もちろんそこで自己をみつめる厳しい神の目が存在した。その神は唯一絶対で、自己否定の神々以上にきびしく、厳格な神であり、時には神が人間をしつとすることさえあった。自己はその神との間に契約を結び、自らを律する必要があった。

この唯一絶対の神は当初はやはり、自己否定の文明と同じく、森や大海原や大地の中にいた。イエス・キリストはこういつている「石を割つてみろ、木を割つてみろ、そこに私はいる」と。しかし、いつしかこのイエス

の教えは人間中心主義の抬頭の中で、自己肯定の文明の中から失なわれ、ついに「我思う故に我あり」という人間の傲慢の極限の思想にいたるのである。そして、自己肯定の文明の下では、人々は森の中から見つめる神の目、大海原のかなたから見つめる神の目を意識することをしなくなってしまった。

西洋においては、我が思うことが全てであった。しかし、東洋においては我思うことは全てではない。我思うことはほんの小さなことがらにすぎず、この世にはもつと巨大な我を見つめる目が存在する。こう考えるのが東洋の思想なのである。

西洋においては、我が思うことが全てであった。しかし、東洋においては我思うことは全てではない。我思うことはほんの小さなことがらにすぎず、この世にはもつと巨大な我を見つめる目が存在する。こう考えるのが東洋の思想なのである。

五、おちこぼれ型の天才

若き日の空海や最澄、あるいは日蓮や親鸞が、当時の世間的榮達の道を踏みはずしたおちこぼれがあつたことは確實である。強い自己否定に陥り、その精神の苦悩と闘う中で、新しい宗教を創造したのである。

もし、彼らがおちこぼれることなく、世間的榮達を達成していたなら、天台宗も、真言宗も、日蓮宗も浄土真

宗も生れなかつたにちがいない。

そして、自己否定の闇の中でもがき苦しむ彼らを救つたのは日本の森であり、日本の海であった。自己否定は日本人が古代以来持ちつづける文明の本質であった。その文明の本質いや日本人の本性を日本の森や海の中で発見した時、彼らは悟りを開いたにちがいない。自己否定こそまさに日本人のアイデンティティだつたのである。宗教者の中で、もし自己否定など体験したことがない人がリーダーとなつていたら、その宗教はにせものである。

戦後五十年間、日本は自己肯定型の文明を理想にしてきた。したがつて学校教育でも、はつきりと自分の意見を言うことができる自己肯定型の秀才を育成することに全力が注がれた。そして、ついに自己肯定型の文明に追いつき、豊かさを手に入れた。なのに、この心の空虚さは何なのか。それは、自己否定型の文明に立脚した日本人の魂がそれと乖離した自己肯定の文明の中でうずくものである。

本来の文明の本質とは異質の道をひた走りに走つてき

た今、豊かさを手にした今、その文明の乖離が人々の心に空虚さをもたらしたのである。だから、二十一世紀の日本のヴィジョンがみえない。しかも、正しい解答のある問題のみをいかに早く、いかに正しく解くかの訓練をつんできた問題解決型の秀才にとつては、これまで誰一人として正しい解答を出したことのない地球環境問題や人口爆発など二十一世紀に我々をまつている難問を解くことは、かならずしも得意とするところではない。

二十一世紀の人づくりの時代に、日本はまったく新しいレールを、未知の大海上にむかって、何の参考書もなく独自の力で敷いていかなければならないのである。その時に必要な人材とは、既存のレールに適合した問題解決型の秀才ではなく、むしろおちこぼれ型の天才なのではあるまいか。

秀才は少ないがおちこぼれは多い。そんなおちこぼれの中に、二十一世紀を切り開く能力をそなえた若者を発見し、育成していくことが、日本の各界のリーダーたちの責務ではないかと思うのである。

もちろん、いくら天才的な才能があつたとしても、そ

の才能を見出してくれるよきリーダーがいなければ、その才能も花開くことなくくち果てる。最澄が桓武天皇に見出され、空海が嵯峨天皇に見出されたように、おちこぼれ型の天才をこの世に送り出すリーダーの役目もまた重要である。

日本丸が荒海の中で航路を見失つて沈没しないためにも、空海が「鎮護國家」を説き、日蓮が「立正安國論」を提示したように、宗教家もこの国の未来に対し、真剣に摸索し、新たなヴィジョンを提示しなければならない時代にたちいたつたと思うのである。

(やすだよしのり・国際日本文化研究センター教授)